

長岡造形大学 美術・工芸学科 美術表現コース 卒業研究 I

学籍番号：164030

名前：中村有里

研究室：遠藤研究室

研究テーマ：「モチーフと空間の関係、景色から風景への移行」

## これまでの研究 空気に溶け込むイメージ、壁画の選択

進級展ではインスタレーション作品を展示した。キャンバスの枠をはみ出し、自由な作品を作りたいかった。少し野暮ったくて荒廃したイメージ。描いたものよりも空間を見てほしかったので、透明な素材を用いた。

印象派のようなふわっとした曖昧さを求めているが、好きなモチーフのイメージと描き込み手数を増やす作業は相性が悪く、思い通りの絵が描けなかった。そのため、透明な素材を使って空間に作品が紛れ込めばイメージに近づけるのではと試した。結果として確か

に近づけたが、透明な物体があると日常に異物が紛れ込んだような窮屈な空間が生まれた。

これまでの反省から空間にもものを置いたり壁に掛けたり展示する方法以外のアプローチとして壁画を選択。壁だけでなく床や天井も可能と考えたが、床や天井に絵がある状態は馴染みがなく「日常感」がない。スプレーで描かれた落書きや部屋の壁紙があるように壁に絵がある状態の方がより自然である。

前期では壁画を想定してキャンバスやパネルでマチエルづくりをした。

## 後期研究内容

壁画、景色から風景の移行など表現したいことがバラバラだったが、なにかしら共通点、つながる部分はあるはずだと感じていた。そのまとめ。

壁画を選んだ理由の明確化（キャンバスを使いたくない理由）

額縁に収められた綺麗な絵とは対照なモノの制作

## テーマについて

モチーフは周りの空気や景色があるからこそ引き立つものであり、主役だとしてもその一部となっている。それしか目に入らなかった場合は別になるが、目に入った風景は全体として捉えられている。その関係性の表現。また、景色から風景へ、何気ない景色は目に入った瞬間に自分の感じた印象が反映された風景へと変化する。その過程の表現。ぼーっとしているとき、水面に映し出されているものや光の反射を観察し出すような体験ができる作品にしたい。

私にとって興味あるものや出来事を観察する事と絵を鑑賞することはほぼ同義であるのに一般的に額縁に納められた絵はどこか格式高いものに感じる。その違和感が気持ち悪いしもっとラフに芸術に触れてほしい。誰にだってぼーっとして植物や空や部屋にある小物なんでも観察した事はある。その感覚と等しく作品を見てほしい。それで何を感じとったとか感情自体はどうでもよくて、ただ肩が凝る思いで鑑賞する必要はないと主張したい。その枠から脱却したい思いがあった。

## 作品について：「這う」

壁も含め風景画として制作された雰囲気・空き家のような人の干渉がない要素

→美しいモノを描き、額縁で飾るような一般に想像する美術らしさからの排斥。肩の力を抜いて美術を鑑賞してほしい思いの表現。

## 書き込みすぎないことへの意識

→目の前に広がる景色は見ているようで雰囲気で捉えていて、観察をしない限り細かく見えないので、思い返すと「たしかこんな感じだったはず」程度のあやふやなモノになる。景色か

ら風景の表現は困難を伴った。そのため、雰囲気では捉えられた風景の表現をすることに変更した。

#### ツタというモチーフ

→静かに、潜むように、誰も気付かないほど少しずつ侵食するように這っているツタは、格式高く感じている美術を身近に感じてほしいという想いのメタファー。大半の人が気にも留めないようなどこにでもある景色は、綺麗なものより印象として残りづらい。廃墟にありそうなツタはまさしくそれに該当すると感じたためモチーフとして選択した。

廃れたパネルの効果が大きく作用してくれたおかげでこの作品ができた。まだこのテーマについて探求できる余地が十分にあると感じている。2つのテーマはどれも私の美術の捉え方を訴えたものになっている。身近にいる親しい人間は率先して美術に触れることがない人が多く、私とは相いれない価値観を美術に持っていた。そのため、自分でその問題を解消したい、テーマに自分の価値観を掲げ制作した。この作品を通して少しでも私の思いが伝わればと思う。